暮らしのかわらばん

一期一会

今号のいろいろ

(1) 親鸞聖人物語《後編》

※年末は３０日まで営業！
年始は４日から営業！

平成２３年
親鸞物語と感謝号

国産仏壇と会津漆位牌の仏壇店
奈山佛心堂
☎０７４５－２３－８９１１
（高田川築山信号北角）

新参者へのご支援を心より感謝申し上げます！

（続）親鸞聖人物語

1211年に罪を許されたが、法然上人が京の都で亡くなった事を知り、そのまま関東への布教に旅立ちました。
そして60歳まで、念仏不毛とされていた地に止まり、数々の試練を乗り越え　師法然上人よりうけし念仏の信を身を以て示し、やがて顕浄土真実教行証文類（けんじょうどしんじつきょうぎょうしょうもんるい）・（教行信証）を著しました。
この著作時1224年、聖人54をもって浄土真宗立教宗の年となったのです。

教行信証とは、教二真実の教えとは？　行二とは？　信二とは？　証二とは？　何であるか？を
根本教典の大無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経の浄土三部経に基づき、揺るがない証を述べた大作です
聖人の晩年には、和讃 という釋尊の教えや南無阿弥陀佛の功徳を讃える詩をかかれました。
この　和讃　は、浄土和讃・高僧和讃・正像和讃の三部で構成された大作です。

師・法然上人の浄土宗との違いは、両宗とも念佛宗であり本尊や教典を同じくしながら、
浄土宗では（念佛為先）の立場をとり、浄土真宗は（信心為本）です。
法然上人は、「阿弥陀佛は一念に一度の往生を当て置き給へり」「一念なほ生る況(いわ)んや多念をや」と教えられ、平生念佛で命尽きるとき迄絶やす事なく、阿弥陀佛の本願を信じて、念佛のなかに生活すべき事を教えています。（念佛為先）とは、（選択集）の冒頭にある「往生の業には念佛を先と為す」という一文があり、上記の教え根本となっています。

浄土真宗の（信心為本）とは信心の肝心な事を強調し、必ずお救い下さいという佛の本願を聞いて、
「有り難い」という一念が起こった瞬間に、すでに往生が決定したものとみるもので、これを
（一念発起人清浄）といい、（聞信往生）（絶対他力）が説かれるのです。
この教えにより、故人はすでに極楽に生まれているので、位牌も創らず・盆や彼岸が来ても佛様への供物のあげ方も知らないといい、（門徒もの知らず）という言葉が生まれました。

聖人は62歳の暮れに京都に戻り、布教活動・著作活動を精力的にこなしましたが
関東布教活動の責任者として派遣していた長男善鸞が、念佛仏教弾圧に屈し権力と妥協し、親鸞の子という立場を濫用したため、門徒集団との対立が表面化、止むえず善鸞を義絶するに至りました。
そして1262年11月京都三条の善法房にて、四男の益方や末娘の覚信尼に看取られながら、波乱に満ちた生涯を終えたのです。

聖人の没後、京都東山大谷に廟堂を建てた覚信尼は、遺骨・御影像を安置し留守職を門弟との話し合いで子孫が相続する事となりましたが、やがて覚信尼の孫の覚如と門弟の間でトラブルが起き、覚如はこの廟堂を本願寺という寺号をつけて、血族相続と血脈相続を主張して他の門弟や教団から独立した形をとりました。
本願寺は1332年、祈祷所として朝廷より認可されましたが、一宗としての活動はままならず
４世善如～７世存如までの布教活動は、主に地方で行なわれました。

第８世蓮如上人の時代に、（御文章・御文）と呼ばれている分かりやすい手紙を門徒に与え、僧侶の特権であった読経を日課とさせ、正信偈・和讃４帖を木版刷りにして配布するなど、主に文章による布教活動をしたり、講・組を組織して生活のなかに信仰を結付け、越前吉崎を中心にして北陸に教線を拡大し、全国に拡がりをみせました。

本願寺は山科の本願寺を修学の拠点として繁栄しましたが、火災により焼失したため大阪の石山本願寺に拠点を移しました。
第11世顕如上人は織田信長と激しく対立し、約10年間に及ぶ（石山合戦）を戦いぬきましたが、詔勅により和解、主戦派であった長男の教如との間に亀裂が入り、一時的に勘当した事が西・東分裂の因となったと云われています。
その後豊臣秀吉の時代に京都六条に本願寺を建立、12世教如は弟の准如に門主の座を譲りました。
教如は徳川家康の庇護のもと、烏丸六条に本願寺（東本願寺）を建立し独立しました。
以後准如の血脈は本願寺派（西本願寺）・教如の血脈が大谷派（東本願寺）となり、他の８派と共に法灯が伝えられています。

二佳きお年をお迎え下さいませ！二　合掌